

# 大空 (生徒・保護者向け) 44号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和3年9月7日(火)

## 縹(はなだ)＝露草の輝きのように 朝陽祭文化の部、体育の部

- 10代は長い人生からすると一瞬だが、かけがえのない一瞬であり、今しか流せない涙、今しか味わえない感動、今しかみることができない夢がある。
- 現実に折り合いをつける前に、あるべき理想を追いかけたい。
- 感性は「感動」することによって育つ。また、感動は、英語の「Can DO」に通じ、不可能を可能にする。感動のエネルギーで、この厳しい現実を乗り越えたい。
- 全力を尽くすことが西校の伝統である。本日の感動を明日を豊かにするエネルギーとして、これからの中・高生活を送ってほしい。
- 本日のNFC 感性

### □朝陽祭開会

まず、最初に、今日、この日が、この場所で迎えられたことに、感謝したいと思います。

本年度は、新型コロナウイルス感染の再拡大が続き、直前まで開催自体が危ぶまれました。開催方法も、感染対策を徹底し、直前まで変更に変更を重ね、そのたび毎に、先生方は実施要項や座席配置など、すべてをやり直しました。当初の形とは違うかもしれません。やりたかったことに制限がかかったかもしれません。制約が多く、十分な練習ができなかったかもしれません。でも、これも一つの姿です。もう、例年という言葉は通用しない時代に私たちは生きています。私たちは、過去のフォーマットに頼ることなく、毎年、毎年、新しい形を考えなければならなくなっているのです。

「行事開催は簡単ではないが、『難しい』と言

ってはいけない」ということを2学期始業式に話しました。生徒の皆さんは前向きに試練に挑み、創造性を発揮してくれました。

忘れてはならないのは、皆さんの活動を支えた多くの方々です。保護者の方々も皆さんの活動を支えました。先生方もとても頑張りました。市民文化ホールのスタッフの方々にも多くの協力をいただいています。多くの皆様方に、すばらしい発表という形で、感謝の気持ちを伝えたいと思います。

さて、本年度の大会テーマは「縹～色あせない一瞬を～」です。縹とは露草で、蛍草とも呼ばれ、朝に咲いた花が夕方にはしぼんでしまうことから、万葉集では、はかないものの象徴として歌われています。小説家の葉室麟に「蛍草」という作品がありますが、その中で、主人公が敬愛する女主人の言葉として「蛍草、きれいで、はかなげな名です。蛍は、ひと夏だけ輝いて生を終えます。だからこそ健気で美しいのですが、人も同じかもしれませんね」と語らせています。

10代という時代は、長い人生からすると、ほんの一瞬かもしれません。さらに、今日からの3日間は、短い10代の中の、さらにほんの一瞬でしょう。しかし、この一瞬は、人生の中で、かけがえのない一瞬です。今しか流せない涙、今しか味わえない感動、そして、今しかみることができない夢があるのです。

たしかに、私たちを取り囲む現実には、厳しいことばかりです。しかし、だからといって、現実に折り合いをつけ、あるべき理想を追いかけなくて良いのでしょうか。夢を追いかけましょ

う。困難に挑みましょう。そして、夢の3日間を、みんなの力で創りあげましょう。露草のような、皆さんの一瞬の輝きを期待しています。

## □体育の部開会挨拶

すばらしい天候に恵まれ体育大会を挙げることにになりました。

さて、行事は何のためにあるのでしょうか。それは、「感性」を養うためです。そして、感性は「感動」することによって育ちます。さらに、感動は、英語の「Can Do」に通じ、不可能を可能にします。皆が感動を共有できる体育大会にしていきたいと思います。

さて、心は熱くなっても、自分の行動を客観的に見る、理性的な視点も必要です。特に忘れてはならないのは、自分たちを支えてくれた人、特に保護者への感謝の思いです。保護者は、皆さんが元気な顔で、今日は楽しかった、お弁当ありがとうございましたと笑顔で帰ってくることを期待しています。冷静に自分の体の状態と対話し、くれぐれも熱中症や怪我に注意してください。そして、心だけは太陽の熱さにも負けず、感動の汗と涙を流しましょう。「You can do it!」頑張ってください！

## □体育の部講評

すばらしい体育大会でした。本校創設の言葉に最も多く使われている言葉、それは「全力」です。つまり、「全力を尽くす」が西校のDNAです。今日の体育大会はまさに本校の創設以来の伝統を守ったものでした。感動をありがとう。

体育大会も日本の文化です。日本の運動会は、日本の近代化が始まった明治時代に、外国人教師の指導によって始まったといわれていますが、欧米とは全く違った日本独自の行事として成長を遂げました。正確ではありませんが、例えばアメリカでは「sports day」といわれる体育的行事を実施している学校はあるようです。しかし、どちらかというと個人参加のスポーツイベントで、日本のように、団に分かれて競い合っ

たり、さまざまな団技をしたり、リーダーが応援を盛り上げたり、ダンスをしたりということはありません。

ところが、日本は違います。日本の公立学校で運動会のない学校は、私は聞いたことがありません。保育園・幼稚園の時代から始まり、小学校、中学校、高校と、競技や応援のレベルを高め、私たちは、個人としての技術と、集団としての協調性や一体感を養ってきました。高校3年生ともなると、15年以上、体育大会という行事とともに成長をしてきているのであり、私たちのDNAには、運動会で培った感性が刻み込まれているのです。運動会のこのような意義は再評価されつつあり、最近は大学や専門学校、あるいは企業等でも実施するところもあり、さらには、「UNDOUKAI」として外国にまで輸出しようという動きもあると聞いています。しかし、高校以降の進学先や就職先で、運動会が実施されているところは激減しますし、実施されていても高校までのものとはかなり異なります。そう考えると、高校の体育大会は、運動会という日本文化の集大成と言っても過言ではありません。

高校の体育大会は、君たちが主役になれる運動会としては事実上、最後のチャンスであり、特に高校3年生にとっては、今日が人生最後の体育大会といっても過言ではありません。残念かもしれませんが、過去はどんなに懐かしがっても戻ってきません。過去は、未来を豊かにするためにあるのです。

高校3年生は、今日の感動を支えにして、進路達成という次のチャレンジに向かってください。中学生、高校1・2年生の皆さんは、今日の先輩の姿を目に焼き付け、伝統を引き継いでください。

今日の感動が、これからの中学、高校生活の、新たなエネルギーになることを期待して、大会の講評とします。感動をありがとう。